

## クザヌスにおける《contractio》について

酒井紀幸

### I 小序

《縮限》contractio 概念がクザヌス哲学において重要であることは、言うまでもない。この概念を顧慮せずには宇宙を、万物を、そして人間を論ずることは不可能である。〈存在者とは、はたしていかにして存在しうるのか。〉このように問うことが、そもそも哲学にとっての根本的な問いかけであるとして、この《縮限》概念がクザヌスにおけるその問いかけの1つの解答を孕んでいる以上、この概念の重要性の認識は当然のことといえる。

しかしながら重要性の認識が、必ずしも理解の正確さを保証するものではない。その意味では、クザヌスのこの《縮限》概念ほどその重要性にもかかわらず、厳密なる検討がなおざりにされてきたものも少ないのではなかろうか。むしろそれにはいくつかの理由が考えられよう。第一に、クザヌスにおいてこの概念が頻繁に用いられるのは、かれの哲学的著作活動の初期、すなわち1440年代のとりわけ前半に限られ、それ以降は、たしかに用いられはするものの、極めて部分的であるために、かれの思索活動における概念的発展を跡づけることが困難となっている点である。また第二に、比較的頻繁に用いられる著作、例えば、*De docta ignorantia*, *De coniecturis* 等の著作においても、クザヌスの叙述自体の曖昧さが存在していることは否み難い事実である。そして第三に、研究者の側の問題としては、そのテキストの曖昧さに起因してか、限られた部分を拠り所として《縮限》概念を規定し、固定的な観念をつくりあげているという点である。このような諸要因が絡みあって、われわれのクザヌス理解は一層困難となっているように思われる。

ならば《縮限》とはいかに思惟されてしかるべきであろうか。

さしあたりわれわれは、《縮限》概念それ自体についてみる前に、その根柢に横たわる根本問題について考察すべきであろう。

## II unitas と pluralitas

*De docta ignorantia* 第Ⅱ巻は、周知のように、《universum》を取り扱う部分であり、構成上第Ⅰ巻の神論、第Ⅲ巻のキリスト論の中間に位置するものである。<sup>(1)</sup>この第Ⅱ巻の厳密なる叙述を終えたクザーヌスは、その最終章においてつぎのように語っていた。「諸々の天球、諸々の星や、諸々の天体の領域において、万物の一致が万物の多様性とともに関わりなく在り続けるようにと、このような御技をお使いになる製作者に誰が驚嘆せずいられるであろうか<sup>(2)</sup>」と。Quis non admiraretur…? とはじまるこの一文に、クザーヌスの《universum》に関する根源的な問いかけのすべてが集約されているといっても過言ではない。注目すべきは、《omnium diversitas》と《omnium concordantia》との対照である。一なる世界 (unus mundus) のうちにある夥しい数の星辰 (magnitudines stellarum) やさまざまな事物 (res variae et diversae)、この対照である。じっさいクザーヌスの驚嘆は、なるほど最終的には神の御技へと向けられているにせよ、直接的にはその一なる世界の多なる事物という事態に由来するものである。そしてクザーヌスの問いかけの出発点もそこにあるといえる。「いまや事物の一性あるいは *universum* が多性のうちにあり、反対に多性が一性のうちにあるさま (quomodo) をご覧なさい<sup>(3)</sup>」とは、クザーヌス自身の語るところである。多なるものが、一なるものでもあり、一なるものが多なるものでもある。この事態はいかにして (quomodo) 可能であるか。この問いかけが、《De docta ignorantia》第Ⅱ巻の主題であった。

## III 《縮限》の《関係性》

主題が一性 (unitas) と多性 (pluralitas) とへの問いであるとすれば、その展開、すなわちこの問いかけに対する理論的解答こそは《縮限》論にほかならない。じっさい「縮限について正しく考察することによって、全ては明らかとなる<sup>(4)</sup>」と語るときクザーヌスが、《明らかとなる》と考えていた事柄は、この一性と多性との関

係であったといえる。

クザーヌスは、《一なる宇宙》*unum universum*<sup>(5)</sup>と表現していた。《*universum*》とは、まずなによりも《一》である。それは、複数形の万物がそうであるところのもの (*id, quod sunt omnia*)<sup>(6)</sup>として単数形 (*id*) で存在する。またそれは、「反対物のような縮限的対立物に先立つ」<sup>(7)</sup>ものである。ここでの《先立つ》*praeveniens*とは、《多》に先んずるという意味で用いられている。そして《多》に先んずる限り、それは《一》にほかならない。クザーヌスのことばを借りれば、「そこにおいて万物は、多性なしに縮限的な単純性と無区分性とを伴って、縮限的最大者 (*maximum contractum*) それ自体なのである」<sup>(8)</sup>。

しかしながら《多性なしに》*sine pluralitate* とはいえ、この宇宙には、この眼前の世界には、様々な事物の存在が見出されうるのではなからうか。じっさいクザーヌスがつぎのように語っていたことを思い起こすべきである。「宇宙は、太陽でも月でもないけれども、太陽においては太陽であり、また月においては月なのである」<sup>(9)</sup>と。それゆえ「宇宙とは、……多なるもの」*universum……esse plura*<sup>(10)</sup>である。

が、ここにおいて1つの疑問が生じてこよう。なぜなら《一》が《多》であるのだから。この《*universum*》が《一》であると同時に《多》であるとは、はたしていかに思惟されるべきであろうか。

《縮限》概念が論じられるとすれば、まさにここにおいてである。《*universum*》が、太陽のうちにあつて太陽でありうるのはなぜか。クザーヌスによれば、それは《*universum*》が《縮限的何性》*quiditas contracta*<sup>(11)</sup>であるからにほかならない。一方の神の場合は、太陽のうちにあつてなおあくまでも神であり続け、《絶対的何性》*quiditas absoluta*<sup>(12)</sup>であり続けるとされていた。

また《*universum*》が多なるものでありうるのはいかにしてか。それは、《縮限的な在り方において》*contracte*<sup>(13)</sup>のみである。すなわち「宇宙の一性は、多性によって縮限されており、その結果、一性は多性においてある」<sup>(14)</sup>、そのような在り方においてのみである。被造世界にあつて一なるものが多なるものでありうるとすれば、縮限という《関係》のゆえである。このように個物の存在とは、縮限に由来するといえよう。じっさい「縮限とは」、クザーヌスの簡潔なる定義を採用するならば、「何ものかになること、すなわちこのものあるいはあのものとして存在するに

いたること」<sup>(15)</sup>なのである。<sup>(16)</sup>

縮限とは何よりもまず《一》と《多》との《関係》それ自体であることが、以上の考察より明らかとなった。それは、一なる《universum》がこのもの、あのものに《なる》、あるいはこのもの、あのもので《ある》という場合のその存在の關係に他ならぬ。が、さらに問われてしかるべきは、《縮限》概念それ自体である。

#### IV 《縮限》概念の解釈をめぐって

今日、《縮限》概念の代表的な解釈には、大きくいって2つあるといえる。第一のそれは、絶対的な最大者、絶対的な一性（神）が、宇宙、類、種、個物へと限定されることとみる解釈である。<sup>(17)</sup>第二のそれは、神の自己縮限、すなわち神自身による神自身の自己限定とみる解釈である。<sup>(18)</sup>第一の見解と第二の見解との相違を考察すると、前者が個物による神の限定を意味するのに対し、後者は神の自己縮限として、神による神の限定を意味することが明らかとなる。

にもかかわらず両者には、共通の地盤というものが考えられよう。それは両者とも縮限を神と個物（世界）との關係のうちで成立するものと結論する点である。前者についてはこのことは明白であるが、後者についてはどうであろうか。なるほど神の自己縮限である以上、神の自己關係ではあるものの、しかしそこから生み出される世界あるいは個物との關係もその際には不可欠である。じっさいその見解は、「神自身の個物への縮限」<sup>(19)</sup>と表現しているごとく、神と個物との間に縮限の成立することを認めざるをえない。<sup>(20)</sup>

しかしながら、こうした《contractio》解釈に問題点がないと言いきれるであろうか。神が限定されて個物になる、あるいは神が自らを縮限して個物になるという解釈は、はたしてクザーヌス自身の語らんとしたことであるのか。

クザーヌスの同時代人ヨハンネス・ヴェンク Johannes Wenck は、クザーヌスが神と万物との一致という思想によって両者を同一視しているという批判<sup>(21)</sup>を行なったが、もしかりにさきのような解釈が容認されるとすれば、ヴェンクの批判は、妥当性を有することになりはしないであろうか。というのも神それ自身が個物へと縮限されるとすれば、神の超越性は疑わしきものとなり、神と万物との区別は単なる量的差異へと還元されてしまう危惧が生ずるからである。この点でわれわれは、さき

の2つの見解には疑問の余地があると考える。

ならば《縮限》とは、いかに思惟されるべきであろうか。

## V 《縮限》概念の解明(I)

われわれは、予め《contractio》概念のもつ諸側面を提示することにより、われわれの考察の方向を明らかにしておくべきであろう。

- (1) 〈absolutum〉との在り方の対比としての《縮限》
- (2) 被造物自体の自己<sup>・</sup>関係としての《縮限》
  - (a). マクロコスモスの《縮限》
  - (b). ミクロコスモスの《縮限》

まず2つに縮限の意味を大別することができる。(1)の〈absolutum〉との在り方の対比としての縮限という観点には、〈contractum-absolutum〉の対概念を関係としてではなく、在り方の対比として理解すべきことが主張されている。(2)の被造物それ自体の自己<sup>・</sup>関係としての《contractio》という観点には、本来の縮限という関係は、神と世界(万物・個物)との関係を示すものではなく、世界(宇宙)の自己<sup>・</sup>関係を示すものであるという主張が語られている。その際被造物が2つの世界、すなわち(a)星辰や万物を含むマクロコスモスと(b)人間のミクロコスモスに区分されうることは言うまでもない。

つぎに各々の縮限の意味について具体的に考察してみることにする。

(1) まず〈absolutum〉との在り方の対比としての《縮限》については、どうであろうか。*De docta ignorantia* のつぎの箇所を想起されたい。「このような一性(=絶対的一性)それ自体は、あらゆる関係、あらゆる縮限から普遍的に解き放たれている」と。われわれは、とりあえず〈絶対的なもの〉の性格づけを《解き放たれてあること》<sup>(22)</sup> absolutum esse に求めることができる。もちろんその表現は、被造的世界のあらゆる関係からの超越を示している。したがってそれは縮限されることもないし、実際に目に見えるもの<sup>(23)</sup> (concretum)として現われることもない。とすればそのような〈absolutum〉に、いかにして縮限的なものが在り方という点で対比されうるのであろうか。

われわれは、ここで一つの仮説を提示したい。それは、「絶対的なものと縮限

的なるものとの対比としての *contractio* 概念が用いられる場合には、*contrahere* の完了分詞である形容詞としての *contractus*, -a, -um ないしは、そこから派生した副詞の *contracte* が用いられている」という文法上の分類に基づいた仮説である。元来、形容詞あるいは副詞は、名詞、動詞等の修飾語として、ものの在り方、様式、様態、仕方を示すものであることを考えるならば、この仮説もけっして唐突ではない。じっさい形容詞として、副詞として用いられている箇所の多くには、それに対応する《*absolutus*, -a, -um》、《*absolute*》の語句が見出されるのである。<sup>(24)</sup>

《*contractus*, -a, -um》あるいは《*contracte*》が《*absolutus*, -a, -um》あるいは《*absolte*》に対比された限りでの《*modus*》を意味するとすれば、この対概念の示すところがもはや両者の間のいかなる関係でもあらぬことは明らかである。むしろ縮限的なものは、絶対的なものから《比なしに降下している》*cadere absque proportione*<sup>(25)</sup> のであって、それゆえこの対比の示すところは両者の区別であり、隔たりであり、《無》関係性なのである。

(2) 《*contrahere*》が《*contractus*, -a, -um》として、あるいは《*contracte*》として用いられた場合に対して、動詞としてそのまま用いられた場合はどうであろうか。被造物自体における関係がいわれるとすれば、まさにその時である。なぜなら、縮限というタームが動詞として用いられる場合には、主語、目的語等が明示されざるをえなくなるからである。すなわち動詞で結ばれた主語、目的語等の《関係》が問題となるからである。われわれは、クザーヌスのテキストにおいてこの関係の主体と客体とを見極めることにより、関係としての縮限の根本性格を明らかにすべきであろう。

## VI 《縮限》概念の解明(II)

(a). 関係とは、何ものかの何ものかに対するかかわりである。《*contrahere*》が関係を示すこと、ならびにその関係の内実は、何ものかの何ものに対する作用であるかを明らかにすることによって、確認されうるであろう。そこで第一にマクロコスモスの縮限について、何ものかの何ものに対する縮限であるかをみてみたい。

何よりもまず《宇宙の一性》*eius* (sc. *universi*) *unitas* は《多性》*pluralitas* によって縮限されている。<sup>(26)</sup> さらに《縮限的何性 (=宇宙の本質)》*quiditas contracta* は、

太陽や月といった個物において縮限されている<sup>(27)</sup>。あるいは、《個物》quodlibetが《万物》omniaを縮限するともいわれていた<sup>(28)</sup>。また《宇宙の一性》universales unitatesが《個物》particulareによって、《宇宙》universumが《個物》quodlibet particulareによって縮限されるといわれていた<sup>(29)</sup>。別の箇所では縮限関係は、事物(res)の普遍的なるもの〔宇宙的なるもの〕universaliaに対する関係でもあった<sup>(30)</sup>。宇宙の三性についての文脈では、可能性(possibilitas)と現実態(actus)との縮限が語られていたし、また別の文脈においては、宇宙の全体(figura mundi)と部分(eius partes)<sup>(31)</sup>との縮限が語られていた<sup>(32)</sup>。

こうした事実より明らかなことは、《縮限する》という関係が、個の普遍に対する関係ではあるものの、個物が神を縮限するという関係ではないという点である。むしろそれは、おおむね個物が宇宙を、したがって多が一を縮限するという関係を示しているのである。

クザーヌスは、「絶対的に最大である神の本性が、縮小化されて、有限的かつ縮限的な本性へと移行することはありえず、同様に縮限的な本性のその縮限が減ぜられて、端的に絶対的な本性になるということもありえない<sup>(33)</sup>」と語っていたが、もしわれわれが指摘したような事実を認めないとすれば、このクザーヌスの主張が矛盾を孕むことになるだろう。

《universi contractio》(宇宙の縮限〔関係])<sup>(34)</sup>とは、クザーヌス自身の表現である。なにゆえにかれば、《dei contractio》と術語化しなかったのか。《contractio》がこのものあるいはあのものへと至ることは既にみたとおりであるが、クザーヌス自身の述べるように「一で絶対的に最大なる者(=神)は、……このものあるいはあのものへと縮限されえない<sup>(35)</sup>」とすれば、縮限されうるものが《universum》以外でありえぬことは明白といえよう。

(b). 他方マイクロコスモスについてはどうであろうか。De docta ignorantia 第Ⅱ巻がマクロコスモスの縮限についての用例を数多く提供してくれたのに対し、De coniecturisはマイクロコスモスの縮限についての用例を与えてくれる。その著作を拠り所として、マイクロコスモスの縮限関係が、何ものの何ものに対する関係であるかを確認しておかねばならない。

まずそれは、知性の一性(unitas intelligentiae)の魂(anima)による縮限である<sup>(36)</sup>。

同様に理性 (ratio; unitas rationalis) は、感覺的なもの (sensibilia; combinatio sensibilium) によって縮限されるともいわれている。<sup>(37)(38)</sup> が、こうした縮限関係は、人間においてはなによりもまず人間本性 (humanitas; unitas humanitatis)<sup>(39)(40)</sup> の縮限にほかならない。そしてその人間本性を縮限する者が、個人<sup>(41)</sup>であることは言うまでもない。

ミクロコスモスにおける縮限とは何か。一言でいえばそれは、より多的な認識能力による、より一的なる認識能力の縮限であり、さらに多的な個人による一的なる人間本性の縮限にほかならない。神から宇宙への関係——それを関係と呼ぶとすればであるが——が《cadere》であり、宇宙と万物との関係が縮限であるといわれていたが、同様に神から人間本性への関係は《cadere》であり、人間本性と各個人との関係こそは縮限と呼ばれるべきものである。したがって人間本性は被造的本性であって、神ではないがゆえに、ミクロコスモスにあっても縮限とは人間的宇宙の自己関係として語られていることになる。De ludo globi の靈魂の運動について述べられたつぎの箇所は、このようなミクロコスモスの自己関係性を明瞭に物語るものではなからうか。

「じっさい神は、靈魂ではあらず、また神の聖靈が、人間を動かすのでもない。むしろ——プラトン主義者たちに従えば——自己自身を動かすところの運動が、あなたのうちに創造されているのであり、そしてこの運動は自己と自己の有するすべて<sup>(42)</sup>を動かす理性的靈魂なのである。」

## VII 結論—人間の問いへの転換

クザーヌスが《unitas absoluta》と《unitas contracta》とを区別するとき、そのことによってなにも全く新しいことを語ろうとしていたのではない。むしろそれは、神である光と被造的な光のようなキリスト教の伝統的かつ根本的区別を踏襲したにすぎない。

しかしながらこの《absolutum - contractum》の対概念は、しばしば誤解されている。絶対的なものが縮限されて縮限的なものが生じる、といった解釈が行なわれているのである。がしかし、こうした解釈はクザーヌスにおける《絶対的なもの》の真の理解に基づいているとは言い難いであろう。かれにとって《absolutum



esse》とは、《解き放たれてあること》の謂であった。とすれば《絶対的なるもの》が縮限されるという事態は、明らかな背理である。この誤解の根柢には、何よりもまず《absolutum - contractum》の対概念を関係として理解するという誤謬が潜んでいる。そのような誤謬に対してわれわれは、この対概念をあくまでも在り方の対比として理解することを主張した。その結果、縮限が関係としてあるのは、神に対してではなく、宇宙自体においてであることをも解明した。それゆえ神の在り方と対比された縮限的な在り方を規定する関係（被造的世界の関係）こそが、縮限〔関係〕なのである。

《contractio》とは何か。それは、《universum》それ自体の自己関係である。<sup>(43)</sup>と同時に、われわれ被造物（creatura）に生まれつき具わった（concreatus）在り方（modus）である。このあるいはあの具体的なもの（concretum）のそれぞれが負っている制約（condicio）である。

がしかし、この縮限という制約性を単なる《宇宙論》の意味において、あるいは神からみられた個物の在り方という意味において理解してはなるまい。なぜなら、その場合にはクザーヌスの思索の形骸化は免れえず、かれの最も基本的な視座が失われるからである。われわれは、今一度クザーヌスの生涯の課題を思い起こさねばならぬ。それは、われわれ人間による《神の探求》であった。かれが縮限それ自体を問うとしても、その根柢にはつねに既にその問いを問う《人間》への《問い》が前提されているのである。

自己を問うこと。それは、自己の免れえない《限界性》を問うことである。が、その限界性を問う限り、われわれ人間が、暫定的に確定されたその限界性を超えていくことも事実である。クザーヌスの問いがつねに無限なる神の《探求》の途上を進むものであるとすれば、自己の縮限を問い、かつその縮限を超え出る人間の思索こそは、唯一その探求の完遂を可能ならしめるものであるといえよう。

#### 註

- (1) H. Grunewaldのごとくこの三巻を《Ontologie》、《Kosmologie》そして《Christologie》とすることも可能であろう。Die Religionsphilosophie des Nikolaus Cusanus und Giordano Bruno, Hildesheim 1977, S. 28.

- (2) *De docta ignorantia*, II, c. XIII, n. 178 (テキストは Philosophische Bibliothek 版 [Lat. -dt.] に従った; 以下 *D. ign.* と略す; なお引用文訳出にあたっては、同書独訳および岩崎・大出訳《知ある無知》を参照した。)
- (3) *D. ign.*, II, c. v, n. 119.
- (4) *D. ign.*, II, c. IV, n. 114.
- (5) *D. ign.*, III, c. IV, n. 114.
- (6) *D. ign.*, II, c. IV, n. 113.
- (7) *D. ign.*, II, c. IV, n. 113.
- (8) *D. ign.*, II, c. IV, n. 113.
- (9) *D. ign.*, II, c. IV, n. 115.
- (10) *D. ign.*, III, c. II, n. 190.
- (11) *D. ign.*, II, c. IV, n. 115.
- (12) *D. ign.*, II, c. IV, n. 115.
- (13) *D. ign.*, III, c. II, n. 190.
- (14) *D. ign.*, II, c. VI, n. 123.
- (15) *D. ign.*, II, c. IV, n. 116; *Contractio dicit ad aliquid, ut ad essendum hoc vel illud.*
- (16) 後に述べるように、ここで縮限されるものとは、神ではなく、むしろ被造的原理であるところの《universum》である。
- (17) 岩崎・大出訳《知ある無知》I巻2章の訳者注(3)の解釈は、この系列に属すると考えられる。
- (18) 大阪市立大学の藺田坦氏の論文「無限の思惟—ニコラウス・クザーヌスにおける神と世界—」(上田閑照編『ドイツ神秘主義研究』昭和57年, 所収)は、この立場に立つと思われる。
- (19) 前掲論文, 第3章, 第3節(前掲書, 390頁)
- (20) このことは、*contractio* と *creatio* とを同一視する点にも現われている〔前掲論文第3章, 第1節(385頁) および同第2節(386頁)〕。がしかし、神が世界を創造した (*creavit*) ということと、この宇宙は縮限されている (*contrahitur*) ということとは、異なる次元の異なる領域の事態を示すものである。この点に

については、とりわけ時制に注目すれば明らかとなろう。なお、神が縮限するのでも、されるのでもないことは、以下の論述において明らかとなるはずである。

- (21) この点については、ヴェンクが、*De ignota litteratura* において、クザーヌスの思想は万物を神化する (deificare) ものであるとして批判していたことを思い起こされたい (Corollarium secundum huius prime conclusionis eiusdem docte ignorantie [E. Vansteenberghé, Le "De ignota litteratura" de Jean Wenck de Herenberg contre Nicolas de Cuse, Münster 1910. *Beiträge zur Geschichte der Philosophie des Mittelalters*, Band VIII, Heft 6, S. 26] 参照)。
- (22) *D. ign.*, I, c. II, n. 5.
- (23) *D. ign.*, II, c. IV, n. 112.
- (24) *D. ign.*, II, c. IV ; c. VII, および *De coniecturis* (テキストは, Philosophische Bibliothek 版 [Lat. -dt.] に従った), II, c. XIV, n. 145等を参照。
- (25) *D. ign.*, II, c. IV, n. 114.
- (26) *D. ign.*, II, c. IV, n. 114; 以下, 紙数の制約上, 原文を並記できなかったし, また例証を部分のみに限らざるをえなかった。しかしながら, 引用できなかった部分についても事態は同様であるがゆえに, 説得力に変わりないと思われる。
- (27) *D. ign.*, II, c. IV, n. 114.
- (28) *D. ign.*, II, c. V, n. 117.
- (29) *D. ign.*, II, c. VI, n. 124.
- (30) *D. ign.*, II, c. VII, n. 124.
- (31) *D. ign.*, II, c. VIII, n. 137.
- (32) *D. ign.*, II, c. XI, n. 163.
- (33) *D. ign.*, III, c. I, n. 183.
- (34) *D. ign.*, III, c. I, n. 182.
- (35) *D. ign.*, III, c. I, n. 182; cf *De coniecturis*, II, c. XVII, n. 171-2. そこでも《incontrahibilis》が神を形容するさいに用いられていることに注目すべきであろう。

- (36) *De coniecturis*, I, c. VI, n. 27.
- (37) *De coniecturis*, I, c. VI, n. 28.
- (38) *De coniecturis*, II, c. II, n. 83.
- (39) *De coniecturis*, II, c. XVII, n. 173.
- (40) *De coniecturis*, II, c. XII, n. 143.
- (41) *De coniecturis*, II, c. XVII, n. 173; ここでの《te》が直接的には枢機卿ユリアスを示すものであるにせよ、窮極的には、《個人》を示しているといえよう。
- (42) *De ludo globi*, I, S. 242 (テキストは, Nikolaus von Kues, Philosophisch-theologische Schriften, Band III [Lat. - dt.], Wien に従った)
- (43) クザーヌスは、キリストについて《絶対的かつ縮限的》*absolutum et contractum* (*D. ign.*, III, c. II, n. 192) と述べているが、この在り方を神が縮限されて成立したものと考えてはなるまい。じっさいそれは、絶対的な在り方と縮限的な在り方との知解しがたき《合一》*unio* という意味あいのものであって、神と人間との関係を示すのでも、本性の《転換》*transire* (*D. ign.*, III, c. II, n. 194) を示すのでもないのである。